「思考力・判断力・表現力等」を育成するための指導とその評価
～それぞれの場面でのエキスパートを追究する～

教育実践研究部長　村上　潤

１．はじめに

新学習指導要領が、昨年度より全面実施された。新学習指導要領では、「生きる力を育む」という理念は引き継ぎ、知・徳・体のバランスのとれた力を生徒たちに身につけさせることをめざしている。このうち、「知」に相当する「確かな学力」を構成する３つの要素（学力の３要素）である「基礎的・基本的な知識・技能の習得」、「思考力・判断力、表現力等の育成」、「学習意欲の向上と学習習慣の確立」は、相互に関連し合うものである。

本校では、平成22年度まで、研究主題を「課題意識を高め、自らの問いを深める教育課程～学び合いを通して見つける価値ある学びとは～」と設定して研究活動を進めてきた。その結果、生徒一人ひとりの課題意識を高めることにより、次のような学習効果が得られたことを報告した。

＊「学び合い」を通して、論理的思考力や抽象的思考力を育成することができる。

＊「学び合い」を通して、表現活動につながる力を育成することができる。

＊「学び合い」を通して、授業の内容に基づいた学習の意義を理解させることができる。

そして昨年度からは、「学び合い」についての研究成果を活かしつつ、新学習指導要領について改めて研究を始めることとした。その際に、これまでの研究成果を活かすためには、学力の３要素のうち、「思考力・判断力・表現力等の育成」に着目することがよいと判断した。さらに、「学び合い」の場において、その活動を活性化させる生徒を「学びのエキスパート」ととらえることで研究を始めた。

本研究は３年間の計画で行う予定とし、今年度はその２年目となる。

２．研究主題

＜研究主題＞
「思考力・判断力・表現力等」を育成するための指導とその評価
～それぞれの場面でのエキスパートを追究する～

２．１　「思考力・判断力・表現力等」のとらえ方

「思考力・判断力・表現力等のとらえ方」については、既に全国の研究校や研究団体より研究発表が行われてきた。それらの研究発表は、多くの場合、思考力・判断力・表現力を個別に定義づけしている。その一方で、これら３つの力を関連づけて「まとまり」としてとらえる発表もあった。

本校では、昨年度より思考力・判断力・表現力を研究主題に取り入れた研究を始めた。３つの力については、「まとまり」としてとらえることとし、個別に定義することは行わなかった。ただし、教科ごとの特性もあるので、教科単位での個別の定義は認めることとした。その結果として、一部の教科では、３つの力について、個別に定義することや重みづけをすることが行われた。

ところで、これら３つの力について文部科学省の表記では「思考力・判断力・表現力等」となっている。これに対して本校では、昨年度の研究主題から「等」を外した。その理由は、新たな研究主題による１年次は、思考力・判断力・表現力に特化した研究をめざしたことによる。しかし、「等」を加えた方が研究を進めやすい教科もあり、今年度は「等」を加えることで研究対象の範囲を広げることとした。

なお、「指導とその評価」における「評価」には、「教員による評価」や「生徒による自己評価」などを挙げることができる。本研究では、評価の取り上げ方は教科ごとの判断でよいとした。

２．２　「エキスパート」のとらえ方

２．２．１　研究主題の副題

昨年度からの研究では、研究主題の副題に「エキスパート」ということばを取り入れてきた。「エキスパート」ということばを用いている学習方法としては、「協調学習」[1]を挙げることができる。これに対して、本校では「独自のエキスパート像」の確立をめざした。また、副題の「それぞれの場面」としては、学習活動、学級・学年活動、部・委員会活動など、学校生活の各場面を想定している。しかし、研究対象の場面としては、昨年度に引き続き、「学習活動」を中心とすることとした。

２．２．２　昨年度の研究における「学びのエキスパート」

昨年度に私たちが共通理解した「エキスパートについての考え方」は次の通りである。

「エキスパート」は「活動の場面での引っ張り役」をさす。

これまでの研究のキーワードであった「学び合い」を継承し、それぞれの活動の場において「学びのエキスパート」が「引っ張り役」として仲間をまとめ、活動を活性化させることをめざした指導を行った。「学びのエキスパート」は、特定の生徒に固定されるものではない。生徒一人ひとりが、学校生活の中のいずれかの場面でエキスパートとなれるように「場を設定する」ことが、私たち教員の仕事である。

２．２．３　本校が今年度に新たに考えた「学びのエキスパート」

「エキスパート」と同じような意味を持つことばとして一般的によく使われるものとして「スペシャリスト」と「プロフェッショナル」がある。「エキスパートの定義づけ」を確実にするためには、これら３つのことばの関係を明確にする必要がある。

教育現場における「スペシャリスト」ということばの使用事例を調べてみると、その数はエキスパートに比べてはるかに少ない。「スペシャリスト」は職業教育ではよく用いられているようである。

そして、教育現場における「プロフェッショナル」ということばの使用例は更に少ない。教育委員会制度の歴史に関する論文に「プロフェッショナル・リーダーシップ」という表現が見られる程度である。

瀧本哲史は、「エキスパートとプロフェッショナルとの違い」を次のように説明している[2]。

- 「エキスパート」は、ある分野の専門知識や経験が豊富で、それを売ることで生きている人。
- 「プロフェッショナル」は、エキスパートの上位概念で、専門的な知識・経験に加えて、横断的な知識・経験を持つ人。それらをもとに、相手のニーズに合ったものを提供できる人。

一方、明治大学の図書館職員である坂口雅樹は、「プロフェッショナルとエキスパートとスペシャリストの違い」について、次のように説明している[3]。

- 「プロフェッショナル」は、不特定多数の人の様々な「悩み」を打ち明けられ、それを聞き取って相談にのり、自らの専門的立場からの適切な助言を与え、「その人」の悩みの解決のために全力を尽くすことを自らの使命とする職業人。profess（主張する、明言する）を受ける者。
- 「エキスパート」になるとは「熟達する」こと。「図抜けている」こと。他者よりも「卓越している」こと。経験experienceを積んでエキスパートとなる。
- 「スペシャリスト」は、主題（ある分野の）専門家。例えば「博士課程を修了した者は、図書館学専攻のエキスパートではないが、ある主題分野でのスペシャリストである」といえる。

紙面の都合上、事例の提示は上記の２つに止めるが、これらを踏まえて「プロフェッショナルとエキスパートとスペシャリストの関係」を次のようにまとめた。プロフェッショナルが最も上位となる。

「プロフェッショナル」	＊知識・技能を求めている相手を見出し（聞く力）、知識・技能を発揮する（助言する）。
↑	
「エキスパート」	＊経験を重ね、知識・技能の背景までが分かる。
↑	
「スペシャリスト」	＊優れた知識・技能がある。

そして、「エキスパートの定義」を次のように定めた。

＜「エキスパート」の定義＞ **間違いも含めて経験を積み重ねることで、上辺だけではない優れた思考力・判断力・表現力を身につけた者。　＊熟達者、極意を会得した者**

ここにおける思考力・判断力・表現力は、上述したように、「まとまり」としてとらえている。これらの力は、相互に重みづけが行われていてもよい。

「エキスパート」よりも上位の立場として「プロフェッショナル」があるとすると、研究主題の副題もプロフェッショナルということばを用いるべきという考え方もある。しかし、本校の生徒たちの現状からは、すぐにプロフェッショナルを想定することには無理があると判断した。

３．研究仮説

３．１　昨年度の考え方

本校の研究主題における昨年度の研究仮説と具体的な事例は、次の通りである。

＜仮説＞　学びのエキスパートを育てると、思考力・判断力・表現力等が向上する。
＜具体的な事例＞　仲間との作業において優れた技能を発揮できる生徒 ものを作る・書くなどの作業において、「作業をうまく行うコツ」を会得している生徒がいれば、その生徒は「学びのエキスパート」と言える。他の生徒たちは、その学びのエキスパートからコツを教わることで、自らの技能を向上させることができる。学びのエキスパートとしてコツを仲間に教えた生徒は、自らの存在価値を実感し、自信を持って授業に臨むことができるようになる。その結果として、「思考力・判断力・表現力等」を向上させるきっかけをつかむ。そして、最終的には、その学びの集団全体の思考力・判断力・表現力等が向上する。

学びのエキスパートは、いわゆる「成績優秀者」に限定されるものではない。この具体的な事例では、技能面において優れた技能を持つ生徒の例を挙げた。この他にも、自ら意欲的な行動を示すことで学習集団の活動を活性化させる生徒など、色々な場面での事例を挙げることはできる。

留意すべきことは、「いくら優れた能力を持っていても、それを自分だけのものとしている者は、学びのエキスパートではない」ということである。成績優秀者は、その能力を仲間との学び合いにおいて発揮して、自らも仲間とともに自信を持つことで、初めて学びのエキスパートとなる。

３．２　今年度の考え方

今年度の研究活動を進めていく過程で、複数の教科より「研究仮説は逆の方がよい」という提案があった。その結果として新たに設定した研究仮説は次の通りである。

＜新しい研究仮説＞ **思考力・判断力・表現力等を向上させると、将来につながるエキスパートが育つ。**

今年度の公開授業研究会では、これら２つの研究仮説を併記する形で提示し、どちらの研究仮説に基づくかは教科の判断でよいこととした。今回の発表成果を基にして、本研究の最終年度となる来年度は、研究仮説をひとつにまとめることとする。

４．来年度に向けて

４．１　本校の教育目標と研究主題との関係

研究主題は、理想の生徒像の達成をめざして設定されるものである。本校における理想の生徒像は、教育目標と学校具体目標として示されている。本校の研究主題は、本校の教育目標と学校具体目標の達成をめざすものであることは、昨年度に確認し、次のページの図１に示すモデル図に表した。

学びのエキスパートをめざす生徒は、自主性や創造性を発揮しながら、自己と集団の活動の成果を向上させる。さらには、他の学びのエキスパートへのはたらきかけや、他から学ぶ姿勢も持つ。これらの

活動を通して、本校が教育目標に掲げている「すぐれた知性」「豊かな情操」「健康な身体」を身に着けた生徒として成長する。そして、将来は「社会に貢献するエキスパート」として活躍することが期待できる。この「将来のエキスパート」という考え方は、今年度の「新しい研究仮説」に対応するように思える。しかし、学校生活の中でも学びのエキスパートは想定できる。この場合には、「最初の研究仮説」にも対応する。

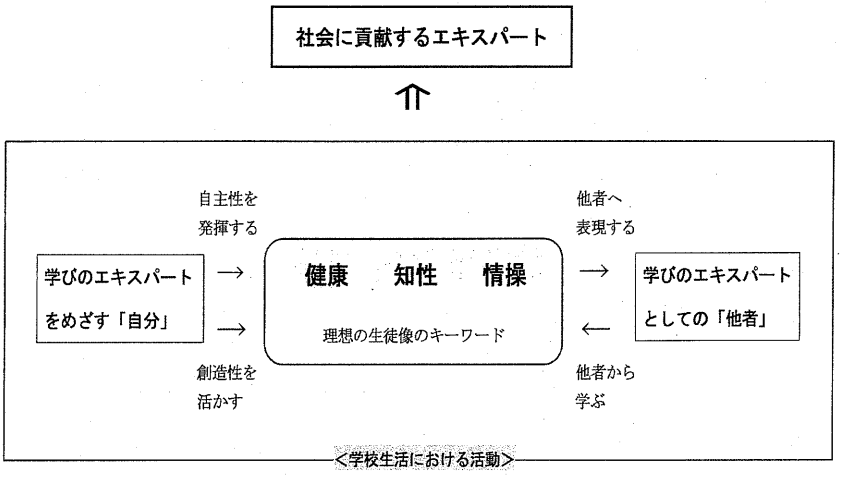

図１　本校の教育目標と研究活動との関係図

４．２　エキスパートからキーパーソンへ

前回の公開授業研究会（平成24年11月）において、「学びのエキスパート」について、様々な意見交換が行われた。それらの中からいくつかを次に示す。

＊エキスパートは、生徒が生まれつき持っているものなのか？育てるものなのか？
＊エキスパートは、大勢いるのか？単元の中でたまたま見つかるものか？
＊エキスパートを想定すると、「中心の人」と「面倒を見てもらう人」に分かれてしまう。
＊エキスパートを想定すると、「授業で便利な子を育てる」ととらえられてしまう。
＊エキスパートを「子どものよさ」と置き換えることはできるが、「教師が出番をつくる」のであれば、エキスパートでなくてよい。
＊エキスパートを「子どものよさ」ととらえると、附属中学校の生徒は「皆よい子」となり、一般的な提案にはならないのではないか？
＊エキスパートに「仲間を活性化させる」ことや「引っ張り役」まで求めることは可哀そうだ。

この２年間、本校では「学びのエキスパート」を柱とした研究を進めてきた。私たちは、エキスパートは「引っ張り役」であると考えた。しかし「引っ張り役の他にも多様なはたらきがある」と考えることもできる。そこで、来年度に向けては、エキスパートを発展させた生徒像として「キーパーソン」を設定することとした。キーパーソンは「どの生徒もなり得ることができる」ものとする。私たち教員の役割は、様々な場面ごとにキーパーソンとなる生徒を見出し、その活動を活かすための指導を行うことである。授業などの場面における私たちの指導力が問われることとなる。さらに、教師側の役割として「舵取り」についての研究も深めていく予定である。

５．参考文献

１）東京大学大学院教育学研究科　大学発教育支援コンソーシアム推進機構ホームページ
２）瀧本哲史「武器としての決断施行」星海社新書１　(2011)
３）坂口雅樹「プロフェッショナル、エキスパート、スペシャリスト」明治大学図書館紀要３号(1999)